

百日紅

# 兄弟

「げんくじくろうく」

「あ、兄上」

門の前で仁王立ちになっている信幸の姿に、信繁は思わず一步下がった。

「岩櫃からおいででしたか」

「おいででしたか、ではない。どこくへ行っていた？」

声も地の底を這っている。

まずい、と信繁は思った。これは、危ない悪戯をやらかしたことや、勝手に敵の偵察に行ったことがばれたときの兄の顔だ。ここで正直に、一人で春日山城まで行ってきた、などといおうものなら、絶対に一喝がとんでくる。

信繁は目をそらしながら、なんとか誤魔化そうと試みた。

「えーと、それはその、ですわ……」

だが信幸は、むすつと腕を組んでいった。

「父上に聞いたぞ。上杉に行っていただと？」

信繁はほつと胸をなで下ろした。

「なんだ、ご存じではないですか」

だがとたんに、思っていたとおりの一喝がとんできた。

「なんだ、ではない！ 春日殿の一件で、逃げ出してきたんだろうが！ 殺されるかもしれないんだぞ！」

首を縮めてそれをやりすごしながら、信繁は内心で天を仰いだ。こうなるとわかっていたからこそ、兄には内密にしてくれ、と父に釘を刺しておいたのに。

口の軽い父に内心で恨みごとをいいながら、信繁はまあまあ、と激昂している兄をなだめた。

「まあでも、だからこそ、上杉殿のことがわかっていて、うまくいったわけですし、こうして無事に帰って参りましたので、終わりよければ全てよし、で」

「よくはない！」

その勢いに思わず目をつぶった信繁であったが、次の瞬間驚いた。兄の頭が肩の上にあった。肩越しに、力ない声が聞こえた。

「ほんとに、おれはもう、心の臓が止まるかと……」

「……兄上」

とんとん、と回された手で背が叩かれた。まるで、生きていることを確かめるかのように。

「……お前が、無事でよかった」

さすがの信繁も神妙な心持ちになった。

「……ご心配をおかけしました」

「うん」

そこで顔を上げると、信幸は真顔になった。

「で？ おれは何をすればいいんだ？」

信繁はまた驚いた。

「兄上が、やるんですか？」

「父上に、お前を手伝えといわれた。何をやるんだ？」

そう問われて信繁は言いよどんだ。まっすぐな兄にはこんな策は告げにくい。

「えーと、兄上にはいいにくいのですが」

だが信幸は、弟のためらいになかまわず、仏頂面で促した。

「さっさといえ」

やむなく、信繁は告げた。

「戦芝居です。上杉の虚空蔵山城で」

「いくさしばい？」

耳慣れない言葉に信幸は小首をかしげた。そんな兄に信繁はいいにくそうに続けた。

「はい。負け戦の芝居なので、兄上のお名に傷がつくかもしれないんですが……」

岩櫃城の攻防で既に武名を上げ始めている信幸である。負け戦の芝居などその名に響くかも知れない。

「そんなことはどうでもいい」

だが信幸はあっさりと言った。

「それで、沼田と矢沢の大叔父上が助かるんだろう。おれの名などささいなことだ」

信繁はにっこりと笑った。

「さすがは兄上」

そうだった。この兄はこういう人だ。自分の名よりも何よりも大事なものは真田の人々、弟の無茶に怒るのも、弟の身を心配してのことなのだ。

「で、どうするんだ？」

再び促されて信繁は自分の策を説明し始めた。

「まずわれらが虚空蔵山城に攻めかかるふりをします。そして上杉方と一緒に、上杉が見事に撃退した、という芝居をする。それから、噂を流します」

「噂？」

「はい、上杉は勝ちに乗じて、上野に攻め寄せてくる、という噂を」

信幸は膝を叩いた。

「読めたぞ。それで北条は沼田攻めどころではなくなる」

「はい」

「上杉にしても悪い話ではない。一兵も損なわずに、上杉が健在だと見せつけることができる。越後の内紛をおさめるのに使える」

信繁は満面の笑顔になった。

「さすがは兄上。だから上杉も話に乗ってくれる、と思っていました」

「ほめるな。そんな策を思いついて、上杉を説き伏せてくるお前の方がすごい」

そう苦笑すると、信幸は武将の表情になった。

「……そうだな、芝居とはいえ、五百くらいはいるか。戦に慣れた兵を使った方がいいだろうな」  
意外な言葉に、信繁は首をかしげた。

「どうしてですか？ 芝居なのに」

信幸は真顔で答えた。

「不慣れな兵だと、その場の気分呑まれて、ほんとうに戦を始めてしまいかねないからな。そんなことになったら、すべておじやんだ」

信繁は唸った。こんなところは、戦の経験がない自分はまだまだ兄には及ばない。

「さすがです。そんなことは私には気づけませんでした」

信幸は苦笑いした。

「岩櫃で、さんざん北条とやりあつてきたからな」

そんな兄に、信繁は心からいった。

「兄上がいて下さってよかった。私では、五百の兵をまとめて戦芝居を指揮することはできません」

そういった弟に、信幸は笑った。

「だがおれには、お前みたいな策を思いついて、上杉を説き伏せてくることはできない。お前がいてくれてよかつた」

そう肩を叩くと、信幸は踵を返した。

「では、芝居の支度をするか、源次郎」

「はい、兄上」

兄弟は連れだって、屋敷へと歩き出した。